

性別違和のある学生の語りからみる アイデンティティの気づきと心理的支援の一考察

平 澤 恵 美

本研究は、性別違和のある学生の性自認に関する体験に着目し、その学生のアイデンティティ形成に関する気づきを通して、学校生活における心理的支援について考察することを目的とした。対象者として、身体が女性で性自認が男性のFTMであるAさんに協力を依頼し、計3回それぞれ60分程度のインタビューをおこなった。その結果、Aさんの物語世界は「女性の身体を持つことに対する違和感」と「男性として社会で認められるための努力」というテーマで構成されていることがわかった。その物語の中に見られるアイデンティティは学童期から青年期まで、心と身体の成長と共に変化し、青年期には自分が自分であることを確信し、周囲からも受け入れられるという経験を経てアイデンティティが形成されていた。また、学校生活における心理的支援では、あるがままを受け入れてくれる専門職の存在とプライバシーが確保された場所が重要であることがわかった。

I. はじめに

日本精神神経学会「性同一性障害（Gender Identity Disorder: GID）に関する委員会」の報告によると、国内の医療機関で性別違和の診断を受けた人の数は2012年末までに延べ1万7000人程度となっている。そのなかで、体が女性で心が男性（Female to Male: 以下FTM）の受診者は約

1万1000人であり、体が男性で心が女性（Male to Female: 以下 MTF）の受診者は約6000人であった。さらに、札幌医科大学の性同一性障害専門外来で2003年から2012年におこなわれた調査結果によると、札幌市内では2800人に1人が性同一性障害であると報告されており、この結果を総人口にあてはめると約4万6000人になると推計される（日本経済新聞2013）。この数は性別に違和がある未受診者を含めていないことから、実際に悩んでいる人々の数はそれ以上になると考えられる。

こうした社会的背景を受け、性別違和のある人々を取り巻く社会は大きく変化し始めている。世界保健機関（WHO）は2018年6月18日に国際疾病分類の第11回改訂版（ICD-11）を公表した。約30年ぶりの改訂では、性同一性障害が「精神疾患」から外され、「保健健康関連の病態」という分類となった。それと同時に名称も変更され、「性別不合」の仮訳が示された。この改訂に影響を与えた精神障害の診断と統計マニュアル第5版（DSM-5）では、2013年に性同一性障害から性別違和に名称を変更している。

また、2018年度診療報酬改定では、日本精神神経学会の性同一性障害に関する診断と治療のガイドラインに基づき、一定の基準を満たす施設に限っておこなわれる性別適合手術が保険適用とされるようになった（厚生労働省2018）。性別違和のある人々に対する差別や偏見は未だ根強いものがあると考えられるが、こうした人々の権利を守る活動は着実に前進しているといえる。

性別違和のある学生を取り巻く学校環境にも大きな変化が表れている。「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」（文部科学省2014）によると、性同一性障害に関する教育相談が全国で606件あったことが報告されており、その内訳は67%が高等学校から、次いで中学校18%、小学校15%と続いている。この報告のうち、他の児童生徒に知らせた上で学校生活を過ごしていたのは22%、知らせていない児童生徒は58%であった。さらに、トイレで特別な配慮がされている学校は

全体の41%、更衣室では35%、服装では31%、宿泊研修では28%、水泳では21%であった。翌年、この調査の結果を受けた対応方法として、「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」（文部科学省 2015）が出され、学校内における具体的な支援の事例が示された。それらは、自認する性別の服装を認めることや、職員トイレ・多目的トイレの利用を認めること。更衣室については保健室や多目的トイレ等の利用を認めること。児童生徒が希望する呼称を名簿上扱い、校内文書にも用いることに加え、宿泊を伴う旅行では一人部屋を利用することや入浴時間をずらすことが盛り込まれている。

こうして教育現場の中にも、次第に性別違和のある学生に対する配慮が実施されるようになってきている。しかしながら、社会の中における差別や偏見が容易に払拭されるわけではなく、さらには性別違和という状況にさいなまれる学生本人が抱える苦悩が消えるわけでもない。自身の性別に違和感を自覚する時期に関する研究では、FTMの場合は小学校入学前から70%、小学校低学年が12.4%、小学校高学年が8%、中学校が5.3%、高校以降が2%であり、MTFの場合は小学校入学前が33.6%、小学校低学年が15.5%、小学校高学年が13%、中学校が17.2%、高校以降が17.9%となっている（中塚 2010）。このように性別違和のある学生は、家族や学校が生活の中心となる時期からジェンダー・アイデンティティと向き合っており、とりわけ身体が子どもから大人へと変化する思春期では、急激な身体に対する違和感と共に性自認に対する悩みに対応していかななくてはならないと考えられる。西野（2011）は、性別違和のある人々によるアイデンティティの形成過程として、性別移行を心理社会的葛藤の解決過程と捉えている。すなわち性別移行という医学的な身体の変化を通して、ジェンダー・アイデンティティを獲得すると述べており、このジェンダー・アイデンティティこそが性別違和のある人々の心理的苦痛を説明する中核概念の一つだと位置付けている。

ジェンダー・アイデンティティの定義としては、様々な捉え方がされて

いる。Stoller (1964) によると「自分が属している性別を知っているという感覚」であり、「男性もしくは女性としての確信」だとしている。また、Money (1965) は「男性・女性・どちらも規定されない性としての個性の統一性、一貫性、持続性」だとしている。エリクソン (1950) はアイデンティティの獲得がテーマとなる時期を青年期と位置付けており、13 歳から 22 歳に該当するこの時期に自分自身を客観的な視点で捉えることにより、自分がどのような人間なのかを知るようになると呈している。自分の価値や能力、長所や短所を知る活動を繰り返すことでアイデンティティが固定化されていくのである。このアイデンティティは自己同一性ともいわれ、"A Sense of Personal Sameness" 自己の単一性、連続性、普遍性が求められる。すなわち、Money による性の統一性、一貫性、持続性でも示されているように、自分が男性もしくは女性、もしくはどちらでもないということに対する揺るぎない感覚に加え、その考えが変化することなく持続していくことで、自身のジェンダー・アイデンティティを自覚することができると考えられる。

エリクソン (1968) のライフサイクルにおける青年後期は 19 歳から 22 歳に該当し、これらの年齢の多くは大学に所属する時期でもある。この時期は将来に向けて自分が何をすべきかを問うと同時に、ジェンダー・アイデンティティの形成途中にある学生にとっては、自分は何者であるのか、大学卒業後にどちらの性として生きていくのかを考えさせられる時期でもある。社会へ羽ばたく分岐点ともいえるこの時期に、自分で自分の人生に意味づけをおこなうことは、自己理解を深めていくプロセスでもある。

本研究では性別違和のある学生による語りを用い、性自認に関する体験を通してアイデンティティの気づきを質的に検討し、学校生活における心理的支援についての考察につなげていくことを目的として実施する。

II. 研究の方法

本研究は、身体が女性で性自認が男性のFTMであるAさんに協力を依頼し、平成30年10月の間に計3回、それぞれ60分程度のインタビューをおこなった。インタビューはプライバシーの守れる会議室でおこない、非構造化面接を用いて、自分が他の女子と違うと感じた時期から現在までの歴史を辿りながら、時間軸に沿って対話形式でおこなった。インタビューの内容は対象者の了承を得た上で全てICレコーダーに録音し、180分のインタビューデータは全て逐語録とした。

インタビューで得られた語りの内容については、Riessman (2008 [2014]) によるテーマ分析を用いて分析をおこなった。語りにみられる主観的世界を理解し、語りの中で展開されているテーマを抽出した。このプロセスのなかで、着目すべき点は語られた内容であり、語るという行為ではない。したがって、小学校時代、中学校時代、高校時代前期、高校時代後期、大学時代に分けて、それぞれの発達段階ごとでまとまりのあるストーリーを導き出し、その内容を分析した。

倫理的配慮として、研究協力の依頼に際し、本人に研究の趣旨について説明をおこない、調査の途中で中断しても可能なことや調査終了後に調査の取り下げが可能なこと、調査結果についても本研究以外の目的では使用しないことを説明し了承を得た。

III. 結果と考察

Aさんは20代前半のFTMである。2歳年下の妹を含め、現在は両親と家族4人で生活している。公立小学校と公立中学校を卒業し、共学の私立の高校へ進学したが、高校1年からの不登校で単位が足りなくなり、高校2年の3月に通信制の高校（共学）へ編入、その後私立の大学へ入学し

た。大学では親元を離れて一人暮らしをしていたが、1年の中頃から就学意欲を喪失し、学校へ行く意味を見いだせなくなり、進路を変更するという理由で退学した。

Aさんの語りは年代ごとに起こった出来事を時間軸に沿って並べたものであり、この語りにプロットを加えてストーリーとみなすことができる(野口2008)。Aさんによる語りからは、時間軸に応じたそれぞれの発達段階で、ジェンダー・アイデンティティを獲得していく経過がみられる。以下ではエリクソンの発達段階ごとに性別違和への気づきについての語りを示す。なお、下記に示す語りはインタビューからの一部抜粋である。

性別違和への気づき：学童期（小学校時代）

A：幼稚園か小学校か覚えてないんですけど、いとこの鯉のぼりがすごいうらやましかったのは、未だにおぼえているっていうか。兜とかすごいうらやましいなって。それが何なのかわからないけど、その気持ちはずっとありました。でっかい鯉のぼりがあったんですよ。それがうらやましくて。自分用のおひなさまを妹がうらやましがってる気持ちが全くわからなくて。自分からしたら、あんなにでっかい鯉のぼりを買ってもらいたいとこのほうがうらやましくて。あの鯉のぼり自分も欲しいなって思ったことがありました。

I：自分の生まれた時の性別に違和を最初に感じたのはいつ頃でしたか？

A：これが性別違和からくるものなのかよくわからなかったんですけど、小学校5年生の水泳の時です。その時まだ着替えとかも更衣室じゃなくて教室で女子はみんな一緒だったんですけど、女性の水着姿をみるのがすごい照れるというか。目のやり場に困るなって思って。どこ見ていいんだろうっていう感じです。照れちゃって。ずっと見てるのも変だし、見ないのも変だし、どうすればいいんだろうって。男子の水着姿は何とも思わなくて。あと、スカートを履きたくないとか、そういうのは普通

にありました。だから物心ついてからはずっとズボンだったけど、妹に中学に行ったら制服のスカート履かなきゃいけないんだって馬鹿にされました。今でも覚えています。それが悲しすぎて泣きました。自分が嫌なのになんで履かなきゃいけないんだろうって。

学童期から、「鯉のぼりがうらやましい」「女の子の着替えを見るのが恥ずかしい」「スカートを履きたくない」などといった気づきが始まり、おひなさまやスカートなど、社会の中で女子として期待されている役割や行動に対して引っかかりを感じることによって、自分が他の女の子とは違うということを実感していることがわかる。一方で、自分の中で何が他の女の子と違うのか、自分のアイデンティティが何なのかを意識するまでには至っておらず、ただ漠然と自分は違うということを感じていた段階であることがわかる。

性別違和への気づき：思春期前半期（中学校時代）

I：制服のスカートはどうなりましたか？

A：我慢して履きました。ただ、中学の時はみんな制服の下に体操服を着てたんで。

I：みんな？

A：はい、制服の下に体操服を着て、制服を脱いでジャージを羽織って感じで。登下校以外は制服を着なかったんです。集会とかある時は制服なんですけど、中に体操服が着れるっていう点で気持ち良かったです。でも、女子だけ集まって話したりすると嫌でしたね。部屋が女子ばかりになると居づらくなったりとか。でも自分でそれが何だったのかわからなかったですね。なんで女子ばかりになると嫌なのかとか理解できなくて。ただ漠然と女子扱いされるのが嫌だったり。それはいつも感じていました。

I：中学校になって身体に変化が起きたりしたときはどんな感じでしたか？

A：母親と喧嘩しました。胸が大きくなってきたり、そういうのがあったんですけど、下着とかつけたくなくて無視したり。下着つけたくないって言ったら喧嘩になって。それとか、やっぱり生理とかきたんですけど、親はよかったねって言ったんですけど、自分は嫌で部屋にこもって一日中泣いていました。やっぱり中学の頃って身体の変化があるんですけど、そういうのが苦痛で苦痛で仕方なかったです。自分が女なんだってことを認めざるを得ない証拠じゃないですか。でもそんなこと親にも言えないし。

I：女であることが苦痛だったのですね。

A：苦痛でしたね。本当に嫌でした。でも誰にも言えなくて誰にも言わなかったですね。その時は本当に自分が何だかわからなかったです。

I：ずっと誰にも言わなかったのですね。

A：高1までは誰にも言っていないですね。最初、普通に女の子がただ単に好きなのかと思っていたんですよ。中2の頃に好きな女の子ができて。女性として女性が好きなのかと。でも、どんどん女子だけ集められたりすると苦痛になる自分が居たり、女子だけになると居づらくなったりとか。それとか女子扱いされるのが嫌だったり。彼女って言われるのが嫌でしたね。で、一人称とかもその時からずっと自分なんですよ。私って言うのが嫌で。中学からずっと自分とかこっちって言い方しかしてないです。ほんと、中学の頃はずっと自分って何だろうって考えてました。

思春期前半期は、「女子扱いされるのが嫌だった」「女であることが苦痛だった」「彼女って言われるのが嫌だった」といった発言からもわかるように、女性でありながら女性であることに対する嫌悪感を強く感じる時期だったといえる。エリクソン（1950）によると、この時期に起こる変化の

根底には性があり、ジェンダー・アイデンティティの形成がはじまる時期とも考えられる。思春期による身体の変化から困惑・不安・罪悪感・混乱が生じ、異性の身体への関心と同時に今までのように他者と接することが難しくなる。Aさんもまた思春期で体験する身体の変化への反応を示している。

さらに、「自分が何だかわからなかった」「自分って何だろう」との疑問を示しており、学童期でみられた自分は他の女の子と違うという感覚から、他の子と違うのであれば自分は何なのだろうといった自身に対して向けられた疑問が表出されていることがわかる。アイデンティティが混沌としている段階であると考えられる。

性別違和への気づき：思春期後半期①（高校時代前期）

A：中学の時は書類とかで男性か女性か聞かれた時は真ん中に○をつけたかったですよ。だからいつも真ん中に○をつけて。でも怒られると思って消して女性に○をつけたり。でも、高校に入ったら変わったんです。真ん中じゃなくて男性に○をつけたくくなりました。

I：何か変化があったのですか？

A：高1の時に性別違和のことを初めて知ったんです。ずっと自分が何なのかわかんなくて。で、悩んでいた時に東野圭吾の「片思い」っていう小説に「性同一性障害」という言葉が出てきて。小説の裏表紙にあらすじが書いてあるじゃないですか。それを読んだ時にあれ？ってなったんですよ。女子だったマネージャーが久しぶりに会ったら男になっていたっていう話で。そのマネージャーは心は男で体が女だったんです。それって自分と似てないかって思って。それで、その単語を詳しくインターネットで調べてみて、自分が当てはまってることが多いなって。それまでってテレビとか見ても男性が女性に変わったりとか、ゲイの人はよく出てたんですけど、FTMさんを見る機会ってなくて。だからわ

からなかったっていうか。ゲイとかレズビアンとか MTF さんはテレビに出てても FTM さんって出てなかったの、自分はこれなんだって思いました。

I：その時はどんな気分でしたか？

A：ものすごくすっきりしました。自分も心は男だったんだってわかって。だから男子と話してるほうが話が合うんだって。だから、一番最初に自分って性別違和なんだよねって話したのは同じクラスの男友達だったんですよ。自分、「女子として見られるのが嫌なんだよね」って話して。それで、「女の子の事が好きなんだよね」って話したりして。そしたら普通だったんですよ。「そうなんだ」って言ってくれて。それで大丈夫なんだって思ったら自分の中で自信になって。あ、いいんだみたいな感じで。自分、高校1年の秋からずっと髪は短くて。その前もそんなに長くなかったんですけど、女子のショートヘアから男子のショートヘアに移行して。

思春期後半の高校初期の頃は、思春期前半期の自身に向けられた「自分ってなんだろう」という疑問から「自分はこれなんだ」という発見に変わったことがわかる。自分と同じように自分の身体に対して違和を感じている人々が居ると知った時点、「性同一性障害」のことを知った時点で、これまで不確かだった自分のジェンダー・アイデンティティが見えてくる。さらに、FTM という言葉を知ったことで、「性同一性障害」の中で自分をカテゴライズできる言葉と出会い、それが青年期における自我アイデンティティの形成にも繋がっていることがわかる。

エリクソン (1950 [1963]: 135) によると、「自我アイデンティティの感覚とは、内的な斉一性と連続性を維持する各個人の能力 (心理学的な意味での各個人の自我) が他者に対する自身の意味の斉一性と連続性とに合致する経験から生まれる確信のことである。」とされている。A さんにとって、ジェンダー・アイデンティティを確立していくということは自分は類

のない存在であり、自分はいつも同じ自分であると認めることでもある。すなわち自我アイデンティティの感覚に一步近づいたと言えるが、未だ確立には至っていないことがわかる。一方で、友人へのカミングアウトという行動からは、アイデンティティ形成の過程において大きな変化をもたらしているとも言える。

性別違和への気づき：思春期後半期（高校時代後期）

A：通信の高校に入学した時に男性の名前にしてもらおうと思って。友達には男性の名前を伝えてました。名前はなんていうの？って聞かれた時に名前を言いたくないっていうのも不自然だし。でも友達からは結局苗字でずっと呼ばれてましたね。

I：じゃあ、通信の高校では配慮してもらえたのですね。

A：通学の時よりは全然マシでした。制服もなかったの、今みたいな髪形と服装でしたね。でも、やっぱり正式な書類とか出席確認とかは本名で出てるんで常に周りに知られるんじゃないかって恐怖との闘いだってたっていうか。どれだけ自分で声を低くするとか、喉ほとけがあるように見せても、結局名前一つで全部ばれてしまって、自分の努力の意味が全くなくなってしまうので。だから着替えもトイレで着替えて後から合流したり、家から着て行ったり。トイレはどっちでも使える多目的ってのが一番いいですけど、通信にはなかったの、コンビニまで行ったり。やっぱり精神科の先生に診断書みたいなを書いてもらえたのが大きかったですね。

I：精神科の病院を受診していたのですね。

A：高1の頃に不登校になって。保健室の先生に親が精神科の受診をすすめたことがきっかけで行くことになって。病院の先生には性別違和の事も伝えて。ただ、その先生からは性別違和については専門じゃないって言われて。とりあえず色々調べてもらって。でもまだ未成年だったん

で専門の先生に診てもらったのは20歳になった時ですね。まだ1回しか専門の先生のところには行ってないんですけど、今度は治療目的においでって言われてるんで。とりあえず今は治療するまでのお金がたまってないんで。あ、でも高1の時から精神科の先生のところには1ヶ月に1回行ってますね。

I：専門の先生に診てもらいたいって思ったのはいつ頃からですか？

A：そうですね、通信で男性として入学してからは強く思うようになりました。早く胸を取ってしまいたくて。女性って声が高くなるじゃないですか。それがすごく嫌なんで、ずっと低くしようと思って。自分は声が低いほうなんで良かったんですけど、高校で調べて手術ができるって知ってからずっと早くしたいって思ってます。戸籍も変えられるって知ってからはずっと早くしたいって思ってます。男性ホルモンだけ打って、戸籍上は変えなくていいって言う人もいるんですけど、自分は絶対に変えて戸籍も変えて。本当の自分として生きるっていうか、絶対にそれをやってやろうって心に決めました。死ぬ時に女として死にたくないんです。

思春期後半の高校時代後期では、男性としての性を生きていくことが明白となっている。「男性の名前を伝える」「声を低くする」「喉ほどけがあるように見せる」「胸を取ってしまいたい」「戸籍も変えたい」「女として死にたくない」などの発言から、Aさんのジェンダー・アイデンティティが確実に男性になっていることがわかる。さらに、男性であることを周囲に認めてもらうために、惜しみない努力を重ね、自分のジェンダー・アイデンティティを守るための行動を取っている。

自我アイデンティティの形成としても、自分がどのような人間なのかを知るという意味ではその基盤が確実なものになってきていると言える。

性別違和への気づき：青年後期（大学時代）

A：大学はありがたいことに健康診断は男性が始まる数分前にしてもらえたり、殆ど男子と一緒にしてもらえたりして。気持ちも楽でした。すごく助かりました。それと、大学って普通にカウンセラーの先生が居るじゃないですか。

I：学生相談室？

A：はい、その先生は自分のこと知っています。最初の頃は相談室の先生に助けてもらいました。相談したいことがあったり、困ったことがあったりすると話を聞いてもらえて。それと、大学の職員の方が話を聞いてくれて。そこでも色々な相談をしていました。で、そこから学部の先生を紹介してもらって。ゼミの先生じゃないけど話を聞いてくれたので。それがきっかけでその先生と一番話をするようになりました。相談にのってもらったり。あと、先生の研究室に行かせてもらって。学校の中に居場所ができて。そこでB先輩やC先輩、D先輩たちと話をするようになって。先輩たちには自分の性別違和の事とか話してないんですけど、普通に接してもらえて。普通に男として認めてもらえるんだっていうのが一番うれしかったですね。自分はこれで問題ないんだってのがありがたかったです。あと、トイレも大学には多目的が沢山あるので助かります。

I：大学でどんな支援があったら良いと思いましたか？

A：LGBTのサークルとかあったら入りたかったですね。普通に地域にある集まりには行ってます。色々な人と交流したいし、色々な人に会おうと話が聞けるし。同じFTMの人に治療の事や手術の事も教えてもらいたいし。それとやっぱり学生相談室って良いですよ。高校にもカウンセリング室ってあるんですけど、隣がすぐ保健室で話していると聞こえるんじゃないかって恐怖感がありますし、通信だと職員室の隣に相談室みたいなのがあるんですけど、それも声が漏れてたりしたらどうしようとか気になるし。職員室って人が集まってきますし、結局何をしても

聞こえてるんじゃないかとか見られてるんじゃないかってのがありますね。学生相談は時間が決まって、予約制なのでその時間は他の人って入ってこないじゃないですか。それと、場所も離れてるんでわからないし。プライバシーが一番怖いですね。

青年後期では、「普通に男として認めてもらえる」「自分はこれで問題ない」との発言からもわかるように、周りの反応から自己洞察をおこない、男性として受入れられているという事実を通して、Aさん自身が自分はこれで良いのだと結論づけることができています。それは、前述した斉一性と連続性の合致する経験を持つことでアイデンティティの感覚を掴んでいる状態であるとも考えられる。すなわち、Aさんは大学生活を送る中で自分が何者であり、どのように生きていくのかという青年期における自我意識を形成し、学校という環境の中で先生や友人と関係性を築き、その人間関係の中で経験する様々な現実社会での葛藤と折り合いをつけながらアイデンティティを模索してきた。青年後期になり、Aさんは自分が自分であることを確信し、その自分が周囲から受入れられるという経験を通して、Aさんにとってのアイデンティティの確立に至ったことがわかる。

一方で、「青年期の終わりが、はっきりしたアイデンティティの危機段階であるからといって、アイデンティティ形成そのものは、青年期に始まるわけでも終わるわけでもない」（エリクソン 1959[1980]: 122）との指摘がある。アイデンティティは試行錯誤を繰り返しながら生涯を通して確立されていくものであり、今後のAさんの経験次第では、これまでに形成されたアイデンティティが変容する可能性もある。

さらに、性別違和のある人々のジェンダー・アイデンティティに寄与する他者を調査した研究では、トランス男性（FTM）は「父母と職場・学校の人」よりもむしろ「友人・職場・学校の人・見知らぬ人」から男性として受け入れられることでジェンダー・アイデンティティが高くなるといわれている（佐々木 2017）。この結果は本調査の結果とも一致しており、

性別違和の事を伝えていなくても、大学の先輩から男として受け入れられたことがAさんの男性としての自信に繋がっている。

IV. まとめ

今回の調査を通して、Aさんによるナラティブの世界は大きく分けて「女性の身体を持つことに対する違和感」と「男性として社会で認められるための努力」というテーマで構成されていることがわかった。前者は学童期と思春期前半期、後者は思春期後半期と青年後期に示されており、時間軸に沿ってアイデンティティが段階的に形成されていく様子がわかる。その段階的な変容は、現在の自分から過去の自分を振り返りながら、自己の物語を語りなおすことで再構成されている。最後の青年後期は一つの到達点として自分の人生を捉え、今後の人生に対し前向きになっていると捉えることができる。

さらに、Aさんの語りから読み取れる学校生活における心理的支援として、それぞれの発達段階で感じ取られていた生きづらさや苦痛を受け止める人と場所が求められていることがわかる。例えば、身体の変化に苦痛を感じている思春期前半期では、なぜ自分が苦痛を感じているのか理解できず、それを誰にも言えず悩み続けていた。康(2017)は、思春期特有の認知特性として、「大人はみんな信じられない」「相談しても無駄」といった考え方へ極端に偏りやすいことを指摘している。こうした特性を配慮しながら、信頼関係を構築し、支援する側が信じられる大人として存在することが求められる。また、Aさんは思春期後半期に性同一性障害という言葉を知ったことで自分が何なのかを知ることができ、自分と同じような悩みを抱える人が居るということを発見することで人生の転換期を迎えている。このようなアイデンティティが困惑した時期にこそ、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの出会いが重要であると考えられるが、こうした出会いも容易ではない。最も身近なクラス担任がこれら

の社会資源への橋渡しとなるべきであるが、Aさんの経験のようにクラス担任が信頼できず良い関係性を築けなかったとの経験もあり得る。

プライバシーが確保できる相談室で話をすることや、悩みを相談できる人として、職員・教員と関係性を構築することは、心理的にもAさんの支えになっていたといえる。また、学校の中に居場所をつくることで日々の生活に安心感を得ることができていたこともわかる。このように大学では、心理的支援を必要とする学生をサポートする相談室が提供されていたり、教員が個々に研究室を持っていたりすることから、プライバシーを守るといふ点ではハード面が確保されていることがわかる。一方で、小規模な大学ではLGBTのサークルや集まりなどは出来づらく、性的マイノリティとして悩みを抱えている学生の声は聞こえづらい。

中塚ら(2009)は、性同一性障害当事者661名のうち8割が小学校までに性別違和感を自覚し、約7割が自殺念慮を持ち、約2割が自傷・自殺未遂の既往歴を持ってたと報告している。ハイリスクとも言える性別違和のある学生に対する支援として、Aさんのように、社会資源の連携が上手く展開されていくケースは稀である。こうした支援が、たまたま起こる偶発の産物ではなく、それぞれの発達段階で必要に応じて提供されるように教育現場での心理的支援の構造を明確にしておくべきである。

本研究の限界として、性別違和への気づきを中心として語りの分析をおこなったため、全ての内容を分析することはできなかった。取り上げることができなかったAさんのナラティブの世界として、「性別違和による生きづらさ」と「両親との葛藤」がある。特にFTMとして学校生活を送ることの様々な苦悩は、全体を通してかなり多くの時間で語られていたため、これらの内容についても分析をおこなう必要がある。また、今回は語りを中心に調査をおこなったため、対象者の数に限界があった。今後は、調査協力者の対象者数を増やし、グループなどを対象として研究をおこなう必要性を感じている。

文献

- Erikson, E.H. (1950) "Childhood and Society", W.W.Norton & Company. (仁科弥生 (訳) (1977) 幼児期と社会 1, (1980) 幼児期と社会 2, みすず書房)。
- Erikson, E.H. (1959) "Identity and the Life Cycle", W.W.Norton & Company. (小此木 啓吾 (訳) (1973) 自我同一性, 誠信書房)。
- Erikson, E.H. (1968) "Identity: Youth and Crisis" W.W.Norton & Company. (岩瀬廉理 (訳) (1973) アイデンティティー青年と危機, 金沢文庫)。
- 厚生労働省 (2018) 「平成 30 年度診療報酬改定について」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000188411.html>, (2018 年 10 月 1 日)。
- 文部科学省 (2014) 「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査について」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm, (2018 年 10 月 1 日)。
- 文部科学省 (2015) 「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応の実施等について」文部科学省初等中等教育局児童生徒課。
- Money, J. (1965) "Sex Research: New Developments", Holt, Rinehart, & Winston.
- 中塚幹也・平松祐司 (2009) 「性同一性障害と思春期」『産婦人科治療』, 99 (6), 589-593。
- 中塚幹也 (2010) 「学校保健における性同一性障害—学校と医療との連携」『日本医事新報』, 4521, 60-64。
- 日本経済新聞 (2013 年 4 月 21 日) 『性同一性障害、全国の推計患者数「4 万 6 千人」』
https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG2100N_R20C13A4CR8000/
(2013 年 10 月 1 日)。
- 西野明樹 (2011) 「性同一性障害の性別移行の中にみるアイデンティティ再構築のプロセス—FTM への半構造化面接から—」『コミュニティ心理学研究』14, 166-189。
- 西野明樹、沢崎達夫 (2013) 「アイデンティティの本質をめぐる研究の動向と課題」『目白大学心理学研究』9, 129-141。
- 野口裕二 (2008) 「ナラティブアプローチの展開」野口裕二 (編) 『ナラティブアプローチ』(1-25) 勁草書房。
- Riessman, G.K. (2008) "Narrative Methods for the Human Sciences", SAGE Publications, Inc. (大久保功子、宮坂道夫 (監訳) (2014) 人間科学のための

ナラティブ研究法, クオリティケア。

佐々木掌子 (2017) 『トランスジェンダーの心理学』 晃洋書房。

佐藤俊樹、齋藤利和ほか (1914) 「『性同一性障害に関する委員会』による性同一性障害症例数と国内性別適合手術数の推定調査」『GID (性同一性障害) 学会雑誌』 7, 73-75.

Stoller, R.J. (1964) "A Contribution to the Study of Gender Identity" *The International Journal of Psycho-analysis*, 45. 220-226.

高橋三郎、大野裕 (監訳) 染谷俊幸、神庭重信、尾崎紀夫ほか (訳) (2014) 日本精神神経学会日本語版用語監 監 DSM - 5 精神疾患の診断・統計マニュアル 第1版、医学書院。

康純 (2017) 『性的に違和感のある子どもたち』 合同出版。